



# 走れ！ ペデグ、走れ！



5月17日  
Sudden Fiction Project

高階經啓  
hirotakashina

## 5月17日のおはなし「走れ！ ペデグ、走れ！」

---

走れ！ ペデグ、走れ！

まだ明けきらぬ渓谷に鋭い少年の声が響く。ざっと草をかき分け地を踏みしめる音がして、ペデグと呼ばれたものが走り出す。迷える羊飼いと羊たちの群れは長い夜を越して、ようやくまた歩き出そうとしている。

ペデグ！ ペデグ？

少年はまだ幼い。ペデグは少年を守らねばならないことを知っている。少年は主人だが、少年を導くのは、少年を導かねばならぬのは自分だということを知っている。だからペデグは自分を呼んだ主人を振り向き、短く吠えて返事するとさらに駆け出し、羊たちをコントロールする。

少年は不安げにその場で足踏みをする。十歳になるかならないか、ひとりきりの夜は恐ろしかったはずだが、いまは無事朝を迎える喜びでいっぱいになっている。間もなくそれは今日中に無事に戻れるだろうかという心配に取って代わられるのだが。夜のあいだ心を占めていた、恐ろしい山の怪異への恐怖はもう後退している。渓谷の向こうの山肌はまだ黒々と夜の闇に支配されているが、稜線の上に見える空は刻一刻明るさを増している。星の数は減り、気の早い小鳥の鳴き声も聞こえてくる。

その時、それが聞こえてきた。最初は細くかすかな音で、そうと気づいて耳を澄まさなければはっきりとは聞こえない。風の音かと思うがそうではない。高く低く長々と引っぱるようにその音は続く。風の音ではないが、では何の音かと言われると見当もつかない。知らない鳥や蛙の鳴き声かとも思うが、およそそんなふうでもない。きれぎれになりそうなくらいかすかでいて、しかも途切れることはない。それがだんだんに近づいて来る。近づくにつれメロディらしきものが聞き取れるようになる。

少年は気づく。それは朝もやに響く口笛だ。

朝もやに響く口笛の伝説は、このあたりの子供なら誰でも知っている。どうして思い出せなかったのだろう？ 夜の森の怪異のことばかり考えていて、すっかり忘れてしまっていた。あの口笛を聞いたものは、どうなるんだっけ？ ひょうひゅるひゅる、ひょう。ひゅひゅひゅひゅひゅひゅひゅひゅひゅひょう。間違いない。背後の森からだんだん近づいて来る。少年は斜面を駆け下り始める。何度も叫びながら。

ペデグ！ ペデグ！

羊たちを追い込んでいたペデグは耳を澄まし、少年を追いつめているものに気づく。ペデグはただちに向きを変え、斜面をいっさんに駆け上がり、少年のそばにぴたりと止まる。怯える主人の顔を見上げる。少年がすがる目つきをしているのを確かめ、ペデグは自分から飛び出し音の方に向かう。

ペデグの姿が森の中に消え、それから間もなく口笛が止む。口笛だけでなく一切の音が止む。口笛も鳴らず、ペデグも吠えず、小鳥たちさえ息をひそめる。少年は一步森の方に近づこうとする。次の瞬間、ごぶばげぼり、というような何ともいやな大きな湿った音がしてペデグの消えたあたりの森の木立が揺れ、それが姿を現した。

夜の山肌のように黒々とした皮膚は吹き出物めいた凹凸だらけ、それが全てぬらぬらと黒光りしている。傍らの低い木と同じくらいの背丈がある。少なくとも大人の二倍はある。巨大な蛙のような姿だが短い二本の足で立ち、またどうやら長い体毛に覆われているらしい。耳まで裂けた口は、たつたいま何かを飲み込んだらしく、奇妙に細長い舌が口のまわりをなめまわしている。

ペデグ！

少年は半狂乱で叫ぶ。その声を聞きつけて、それが向きを変える。そして楽しげな口笛を吹き始める。どしどしつと短い足を踏みしめ、上体を大きく左右にうねらせながら近づいてくる。羊たちがべええべええと騒ぎながら三々五々に逃げ出す。少年は、ああ、ペデグがせっかく集めた羊たちなのに、と考える。自分がどうなるかなど考えることもせず立ちすくみ、立ちすくみ、立ちすくむ。少年の遙か手前で、それはばったりと前に倒れる。いや。倒れたのではない。口を少年の方に向けると大きく開け、その中から長い舌が伸び。

舌が少年に届く直前、不意にそれが地面の上で跳ねた。そしてのたうち回り始め、やがて、驚くべきことにごろんと裏返しになり、仰向けになってじたばたしたかと思うと、その腹が裂け、そこから血と食いかすと消化液にまみれた生き物が飛び出してきた。もちろんペデグだ。あまりの悪臭に鼻がもげそうだが、少年はペデグ！ペデグ！と何度も叫んで感謝する。

たいしたことじゃありませんさ、とペデグは言う。ちゃんと噛みもせずに飲み込んだあいつがバカなんですか。ぼっちゃんのおかあさんもよく言ってるでしょ？　ちゃんと良く噛みなさいってね。

ちょっとの間があいて、少年が言う。ペデグ、おまえ喋ってるのかい？

# 新作スタート。お題募集中。

---

2011年10月1日。

Sudden Fiction Projectの新作発表が始まりました。

1日1篇ペースをめざしていますが、これはどうなるかわかりません。  
毎日、その日のお題を見て、いきなり書き始めていきなり書き終わる。  
即興的に書く Sudden Fictionをこれからお楽しみください。

お題募集中です。

「急募！お題」のコメント欄で受け付けています。  
どなたでも気軽にご注文ください。初めての人、大歓迎です。

(お題の管理上、TwitterやFacebookでは見逃しがちなので、  
どうか上記コメント欄をご利用ください)

それではこれからしばらく新作のシーズンをお楽しみください。

※発表済みの作品をご覧になりたい方は  
「SFPインデックス（ただいま作成中）」  
をご活用ください。

## 走れ！ ペデグ、走れ！ [SFP0320]

<http://p.booklog.jp/book/36095>

著者 : hirotakashina

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/hirotakashina/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/36095>

ブクログのパブ一本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/36095>

公開中のSudden Fiction Project作品一覧

<http://p.booklog.jp/users/hirotakashina>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.